

論理的思考力&発想力入試 言語分野

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は１ページから７ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚と下書き用紙に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙、下書き用紙、問題冊子それぞれの表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は五十分間です。

次の【文章A】・【文章B】を読んで、後の問題に答えなさい。ただし、字数制限のある問題に答える場合、「、」「や。」「等」も一字と数えます。

【文章A】は、小学生の「きみ」が、両親の友人である「ぼく」の家を訪ね、詩を読むことを通して、ことばについての対話を重ねていく文章の一部です。ある暑い夏の日、いつものように「きみ」は「ぼく」の家を訪ね、虫とりの話をします。【文章A】は、「きみ」の話を聞いた「ぼく」が、ふと思いついて「きみ」に読んでもらおうと出してきた「真夜中の蟬」という詩から始まります。

【文章A】

真夜中の蟬 なかのしげはる 中野重治

真夜中になつて

風も落ちたし

みんな寝ねてしまふし

何時けんどうごろやら見当もつかぬのに

杉すぎの木きのあたりにいて

じいつというて鳴く

じつに馬鹿だ

『中野重治詩集』(岩波文庫)

「やさしい」

きみは、ぼくのさしでした。ページを、すぐに読みおえて、ぼつりといった。なんだか読むのも、ちよつとはやくなつたみたいだな。

「やさしい？」

ぼくは、きいた。麦茶をのんだら、こおりが、くぐもつて、鳴った。

「うーん」

きみは、にがわらいをした。「うまくいえない」

「いいんだよ。べつに、うまくいひつようもない」

ぼくも、いった。

蟬は、詩人のことかもしれない。また、おかし詩人のまわりにいた、だれかのこともかもしれない。でも、この詩は、みじかくて、蟬のことだけしかいってない。そこがいい。

「かんそうを、いえなくても、へいき？」

きみは、いった。

「ちゃんといったよ。やさしい、つて。その理由がわからなくても、りっぱなかんそうだ」

「そうかあ。でもね。せみは、ばかって、いわれるだけで、ばかっていいかせないでしょ」

きみは、いった。「そのことが、ずるいとおもった」

「ほんとだなあ」

ぼくは、いった。「むしろ、どうぶつは、ことばがない。だから、ことばで、なにかをいうことは、かならず、にんげんから、いっぼうてきになっちゃう」

ぼくは、みずようかんをたべおえた。さいごに、プラスチックのスプーンで、かかし、こそげる。しばらくためらつて、となりのへやにいき、シンプルな、むらさき一色のひょうしの、本をもつてきた。

誰だれかが言ったに違ちがいない
村上昭夫むらかみあきお

誰かが言ったに違いない

あの犬を連れて行ってくれるように
でなければ

あんなにぎょうぎょうしく

捕獲員ほかくいんがくるはずがないのだ

猫ねこにも 鶏にわとりにも手を出さない犬だったのに

野良犬のらいぬだからと言って殺される

誰が言ってもいいのだ

神様が許してくださるだろう

だが私はどうしたならいい

連れ去られてゆくあの犬を

黙だまって見ていた私は

『村上昭夫詩集 2 動物哀歌』あいが（動物哀歌の会）

きみは、くちびるを、おすんでいる。

「さっきいったみたいに、どうぶつのことを書くとき、ひとは、かならずひきよ
うものになるしかない」

ぼくのいった、つよいことばに、きみはすこし、目を、まぶしそうにした。「で
も、それでも書くのは、やさしいからなんだろうね」

「ひきょうなのに、やさしいの」

きみは、おおきなため息をついて、あたまから、けむりを出すように、ちゃ
ぶだいにつぶした。「わかるようで、わからない」

「うーん。むつかしく、いいすぎたね」

ぼくは、考えすぎたせいか、かゆくなったひたいを、ぼりぼりとかいた。

「わからないけど、どっちのも、読んだとき、すこしくるしくなった」

きみは、いった。といきが、ちゃぶだいの天面てんめんを、すべて、みずようかんのか

らを、かすかにゆらした。

「じゅうぶんさ」

ぼくは、いった。

「せつめいできなくても」

「うん。おねに、そんなかんじがあったこと。そして、せつめいが、できなかったこと。それだけ、ちゃんとおぼえていれば、いい」

ぼくは、いった。

いつか、詩のほうから、きみに、そのいみを、おしえてくれる。

きみは、昼ごはんのために、かえていく。

げんかんで、きよろきよろと、なにかをさがしながら、いった。「ことばがな
かったら、もっと、どうぶつとなかよくできるかな」

「うーん。どうだろうね」

「ことばが、あるから、にんげんは、じぶんが、えらいとおもってるんじゃない
かなあ」

「なるほど」

ぼくは、いった。そして、じぶんも、どうぶつだってことを、わすれてしまっ
のかもね。

「なんで、ことばなんて、おぼえちゃったのかな」

きみは、いった。

「あはは。おかし、そんなことをいった、えらい詩人がいたなあ」

ぼくは、わらった。

（斎藤倫さいとうりん『ぼくがゆびをぱちんとならして、

きみがおとなになるまえの詩集』福音館書店）

【文章B】は、「動物もことばがわかるのか!」というテーマで自由研究をすることにした小学生の「ユイ」と「コウ」が、研究のために色々な分野の学者の話を聞いていく文章の一部です。

二人は、人類学者、動物学者、心理学者から話を聞くことができました。【文章B】は、その次の言語学者から話を聞いている部分です。動物学者の力ナリア先生から、動物も考えている、ということをお話した二人が、言語をもたない動物がどのように考えるのか、ということについて話を聞くところから始まります。

【文章B】

「動物がなにか考えているのかについては、コウのこのラフィがおすわりするときのようすとか、ゴツゴツしたゆかの感^{かんしゅく}触をたしかめるネズミの行動があることとかを力ナリア先生と話したんです。

ほかの動物だってまちがいに^{かん}考えてるよねって」

「考えているやるな」

「でも動物には、ものを考える道具になる人間言語がないのよね？」

「やっぱり考えてないの？」

「お、するどいなユイ。」

「そしたら、もう少し具体的なものでイメージや。」

³皮をむいてお皿で出されたナシやリンゴにフォークがそえられてなかったらどうやって食べるの？」

「手でつまんで食べるわ」

「そう。食べること自体は、フォークやらの道具があってもなくてもできるわけやな。言語についてもおなじことがいえる。言語という道具がいつも必要なのわけやない。

言語を使って考える。言語は使わずに考える。言語を使ってコミュニケーション

ンする。言語は使わずにコミュニケーションする。

これらはすべてできることや」

「言語を使わないコミュニケーションはたとえば身ぶりとか手ぶりだね。言語を使わずに考えるってどんなときにやってるかなあ」

「頭で家のなかを思いうかべて、キッチンからトイレへのいきかたを考えられたりするやるの？」

「じゃあ、もうひける曲なら、いちいち音^{おん}符^ぷをことばで考えずに演奏できるのも、言語を使わない例だね」

「ふー。言語を使わないで考える例をいっぱい思いうかべようとしてたら頭がつかれてきたわ……」

「ぼくも。だんだん、ことばで考えてるのか、考えてることをすぐことばにしているのか、そのへんからあやしくなってきた……」

「それはもう、たぶん両方あるんやるな。」

人間は言語を使うせいで、よけいな心配や不安をかかえるようになってしまった面がある。

動物がことばなしで考えたりつたえたりするのは、おもに目のまえにあるものについてやる。

現実とはちがうこととか、じっさいにはありえないことについてなやんだりはない」

「たしかにうちの小梅は、10年後の自分がどうなってるかとかは考えないだろうな」

うちのラフィだって、もし明日かいじゅうがおそってきたらどこに逃げようとか、いつか自分も死んじゃうなんてことを心配したりしてないよね、きっと。

「人間みたいに科学を発展させたり技術力を高めていたりすることはなくても、よけいなやみはないとしたら、小梅とわたしと、どっちが幸せなのか

しらね」

「なかなか哲学的な（てつがくてき）こというやないか、ユイ。まあ、どっちが幸せかなんてことを考えられるのも、言語があるからやで」

うん、それもそうだよね。

「⁴人間もほかの動物も、それぞれ自分ももてる能力をいっしょうけんめい使って生きてるといふ点は、いっしょやな」

（岡ノ谷一夫編『玉川百科ことも博物誌 ことばと心』）

玉川大学出版部）

〔問題一〕 次の枠内の会話は、【文章A】を読んだ桐子さんが、詩「真夜中の蟬」で、——線部1「じつに馬鹿だ」と作者が書いた理由について、先生と話しているものです。会話を讀んで、この詩の解釈に關する(1)・(2)に答えなさい。

桐子：先生、この「真夜中の蟬」という詩で、鳴いている蟬のことを作者が「じつに馬鹿だ」と書いている理由が、どうしても分かりません。鳴いているわけですから、何かを発信しようとしているのだと思うのですが、なぜその行為が「馬鹿」と言われてしまうのでしょうか。

先生：それには色々な考え方がありと思いますが、今回は詩に書かれている、蟬が鳴いている状況・場所・時間帯を整理して、それらの共通点から、「じつに馬鹿」な理由を考えてみましょうか。

桐子：ではまずは、蟬が鳴いている状況から考えてみます。「真夜中」で、「風も落ち」ていて、「みんな寝てしまう」という状況ですね。考えてみると「風」が「落ちる」って不思議な表現ですね。「風」のこういった様子を表しているのでしょうか。

先生：「落ちる」ということばには「勢いが衰える（おしよろ）」という意味もあるのです。ここでは「風」の勢いが衰える、つまり、風がほとんど吹いていなくて穏やかな状況ととらえられますね。

桐子：真夜中で、風もほとんど吹いていない、そしてみんな寝てしまう、という状況ですね。【①】のではないのでしょうか。

先生：次に場所を考えてみましょう。「杉の木あたり」です。ところで桐子さんは、「杉の木」を見たことがありますか。

桐子：もちろんあります。遠足で山登りをしたときにたくさん見ました。先生：そうですね。「杉の木」というのは、私たち日本人にとっては、よく

目にする機会のある、特別でも何でもない木ということができそうですね。

桐子：たしかに、「杉の木」をめずらしいと思うことはありませんね。

「②」ではないでしょうか。

先生：最後に、時間帯を考えてみましょう。「何時ごろやら見当もつかぬ」とあります。これはどのように考えれば良いと思いますか。

桐子：何時ごろか分かっていたら、蟬は「馬鹿」ではないということですよ。なぜなのでしょう…。

先生：桐子さんは、生活する中で、いつも時間を意識していますよね。例えば、起きるのは七時で、家を出るのは八時で、というように。社会生活を送る上では、時間によってするべきことが決まっているものなのですね。けれども蟬は、その「時間」の「見当もつかぬ」状態なのですよ。

桐子：ということは、蟬は「③」ということになりますね。

桐子：蟬が鳴いている状況と場所と時間帯を整理して読み解いてみると、この蟬が「馬鹿」と言われてしまう理由が分かってきました。つまり蟬が「④」【鳴いていることに対して「馬鹿」と言っているのですね。そう考えるとこの蟬は、けなげでさびしい存在ですし、その鳴き声は、むなしく切ないものに感じます。何だか蟬が少しかわいそう…。

先生：そうですね。蟬に対してそのような感想を抱いた桐子さんなら、この詩を読み終えた「きみ」が「やさしい」と「ぽつりといった」理由も分かるのではないですか。

桐子：はい。この「やさしい」は蟬に向けられたことではなかったのですね。

(1) 会話文中の【①】～【④】に入る語句として最も適切なものを、それぞれの選択肢から選び記号で答えなさい。

【①】 ア そんな状況で鳴いても、蟬の鳴き声なんて誰も聞いていない

イ そんな状況で鳴いても、蟬の鳴き声は風の音に消されてしまう
ウ そんな状況で鳴いたら、鳴き声で蟬の居場所が人間に分かってしまう

エ そんな状況で鳴いたら、蟬の鳴き声がうるさくて皆目を覚ましてしまう

【②】 ア ありふれた「杉の木のアたり」にいて、蟬はいつまでも孤独であり続ける

イ ありふれた「杉の木のアたり」にいて、蟬は安心して鳴くことができる

ウ ありふれた「杉の木のアたり」にいて、虫の中でも存在感がうすくなってしまう

エ ありふれた「杉の木のアたり」にいて、蟬の存在なんか誰も注目しない

【③】 ア 今が鳴くべき時間だと分かったうえで鳴いている
イ 今が鳴くべき時間でないに分かっているながらも鳴いている

ウ 今が鳴くべき時間なのか、そうでないのかすらも分かっていない
エ 鳴くべき時間なんて考える必要はなく、いつ鳴いたって良いと思っている

【④】 ア 迷惑だと分かっているのに
イ 誰にも気づかれないのに

ウ 捕まってしまう危険があるのに
エ 周囲の雑音にかき消されてしまうのに

(2) 会話文の——線部「この『やさしい』は蟬に向けられたことばではなかったのですね」とありますが、桐子さんは「やさしい」は誰に向けられたことばだと考えたのですか。その人物を、次の選択肢から選り記号で答えなさい。また、その人物を桐子さんが「やさしい」と考えた理由を書きなさい。

ア ぼく イ きみ

ウ 「文章A」の筆者 エ 「真夜中の蟬」の作者

〔問題二〕【文章A】の二つ目の詩「誰かが言ったに違いない」は、——線部2に示した通り、「動物哀歌」という題名の詩集に収められています。「動物哀歌」とは、「動物のかなしみの心を述べた詩や歌」という意味です。では、この詩「誰かが言ったに違いない」で述べられているのは、何という動物の、どのようなかなしみの心ですか。「意志」「人間」という語を必ず用いて、一文にまとめて答えなさい。

〔問題三〕【文章B】の——線部3「皮をむいてお皿で出されたナシやリングにフォークがそえられてなかった」という例は、どのようなことを説明するための例ですか。二十字以上二十五字以内で書きなさい。なお、文末の句点は字数に数えません。

〔問題四〕【文章A】の「きみ」は「なんで、ことばなんて、おぼえちゃったのかな」と、【文章B】の「ユイ」は「小梅とわたしと、どちらが幸せなのかしらね」というように、それぞれ人間が他の動物とは異なる「ことば／言語」を持っているということが本当に良いことなのか、という疑問を抱くようになっていきます。二人がそのような疑問を抱くようになったのはなぜですか。解答らん「と考えたから。」と教わったから。」につながるように、それぞれの理由をまとめなさい。

☆ここから先の二問は、あなたの考えを書く問題です。問題文を丁寧に読み取って書くこと。

〔問題五〕【文章B】の——線部4「人間もほかの動物も、それぞれ自分もつる能力をいっしょうけんめい使って生きてる」とあるように、私たち人間もふくめた動物は、それぞれが様々に異なる能力を活かしながら生きています。動物たちが持っている能力には、「言語」とは逆に、人間が持っていない能力ももちろんあります。それらの能力の中には、もし人間が身につけることができれば、人間に良いことをもたらす能力もあります。たとえば象の足の裏の、ごく小さな音や振動をとらえる能力を人間が身につければ、いち早く地震に気付くことができ、より早く避難することができるかもしれません。

このように、人間に良いことをもたらすとあなたが考える、身のまわりにいる動物の能力を一つ挙げ、解答らん「①活用する能力」に合うように書きなさい。また、その能力を活用することで、人間にとってどのような良いことがもたらされるのかを解答らん「②良いこと」に書きなさい。

〔問題六〕〔問題四〕では、人間と動物との関係や比較ひかくの中で、人間が「ことば／言語」を持っていることには良くない面もある、と考えることができることを指摘してきしました。しかし、その指摘以上に「ことば／言語」には、良い面がたくさんあると考えられます。実際に、私たち人間は「ことば／言語」を使うことで、日々の生活を成り立たせています。

では、あなたが考える「ことばの良い面」は何ですか。人間がことばを持つているからこそできることを一つ挙げ、あなた自身の体験を根拠こんきょに、左の枠内わくの《条件》にしたがって書きなさい。

《条件》

- 1, 三百五十字以上、四百字以内で書くこと。段落をかえたときの残りのまず目は字数として数えます。
- 2, 題名は書かないこと。
- 3, 原稿用紙げんこうの正しい使い方に沿って書くこと。
- 4, 二段落以上で書くこと。
- 5, 第一段落で、あなたが考える「ことばの良い面」を、はっきりと具体的に示すこと。
- 6, 第二段落で、第一段落で示したことが良い面だと実感できたあなたの体験を書くこと。